沼津工業高等専門学校研究報告
第59号，2025年2月

沼津高専１年生の読書調査から読み取れること

村上 真理 *

Report on Reading Through an Attitude Survey of 1st Graders at NUMAZU college

MURAKAMI Mari *

Key Words:　habit of reading books, students' attitude toward readings, awareness of library users,

1.　はじめに

2023 年 11 月 6 日、全国学校図書館協議会（全国 SLA）が、「第 68 回学校読書調査」を全国の小学生 3,447 人、中学生 3,317 人、高校生 4,048 人を対象に実施してその結果を公開した。「学校読書調査」は、全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について毎年実施されている調査である。それによると、2023 年 5 月 1 か月間の平均読書冊数は、小学生が 12.6 冊、中学生が 5.5 冊、高校生が 1.9 冊であり、5 月 1 か月間に 1 冊も本を読まなかった割合は、小学生で 7.0%、中学生で 13.1%、高校生で 43.5%であった[１]。参考に 2023 年の全国大学生協同組合連合会「学生生活実態調査」によれば大学生の不読率は 47.4%である[２]。

つまり、小学校から中学校、中学校から高校と、学校生活が長くなるほど、子どもたちは本を読まなくなる傾向にあるということだ。小学生の約 90%は毎月何らかの本を読んでいるのに、高校生ではおおよそ 2 人に 1 人は本を読まなくなるのである。

このように過去には読書に慣れ親しんでいたであろう、また今も慣れ親しんでいるこの年齢層の、本に対する意識や環境を知りたいと思い、本科 1 年生約 120 名にアンケートを実施した。

質問項目は「読書が好きか」「読書は必要だと思っているか」「月に平均して本を何冊読んでいるか」「月に 0 冊と解答している学生のその理由」「家の人（周囲の大人）は読書をしているか」「家の人と同じ本を読んだり違う本を同じ時間に読むことがあるか」である。

次に読書をする学生を対象に「本を読む理由」「読書習慣に影響を与えたもの」「本の手配の手段」「よく読む本の分野」の 4 項目を聞いている。

また、読書を目的とした学校図書館の利用の有無や読書をするにあたって図書館に望むことを全員に聞いている。

本稿はこれらの結果からこの年代の読書に対する意識や傾向を報告するものとなっている。そして把握した状況から沼津高専生に読書の推奨が必要であると思われればその手段を検討したいと考えている。

２．回答結果

はじめに本科 1 年生全員を対象にした一般的な質問に対する結果を示す。

２．１「読書が好きか」

この質問には「好き」が 27%、「どちらかと言えば好き」が 54%、「どちらかといえば嫌い」が 14%、「嫌い」が 5%であった。

２．２「読書は必要だと思うか」

この質問には「思っている」が 47%、「やや思っている」が 41%、「あまり思っていない」が 9%、「全く思っていない」が 3%であった。

先の質問で「読書が嫌い」、「どちらかと言えば嫌い」と回答した学生のこの質問への回答は、「思っている」が 9%、「やや思っている」が 48%、「あまり思っていない」が 30%、「全く思っていない」が 13%であった。

２．３「月に平均して本を何冊読んでいるか」

これは冒頭で触れた点である。結果は「０冊」が 26%、「1 冊～3 冊」が 53%、「3 冊～5 冊」が 6%、「5 冊～８冊」が７%、9 冊以上が 3%であった。

２．４「本を読まなかったのはなぜか」

月平均の冊数が「0 冊」であったことの理由は次の通りで

*教養科
Division of Liberal Arts

ある。なお、こちらの質問には複数回答する学生がいたので各項目に回答した人数を記す。

趣味があるから(10 人)、本を読みたいと思わないから（9 人)、ゲームやテレビやインターネットの方が楽しいから（9 人)、部活があるから（9 人)、勉強があるから（9 人)、友達と遊んでいるから（7 人)、家事手伝いがあるから（1 人)。

２．５「家の人（周囲の大人）は読書をしているか」

こちらと次の質問の意図はそれぞれ家庭が持つ読書に対する意識度合や、学生が読書活動がある環境にいるかの把握である。

結果は「よく読んでいる」が 25%、「たまに読んでいる」が 44%、「あまり読んでいない」が 18%、「読む姿を見たことがない」が 13%であった。

２．６「家の人と同じ本を読んだり違う本を同じ時間に読むことがあるか」

こちらの結果は「1 週間に 1 回」が 2%、「2 週間に 1 回」が 3%、「1 か月に 1 回」が 6%、「2 か月に 1 回」が 7%、「1 年に 2～3 回」が 21%、「ない」が 61%であった。

3. 読書人の意識や状況

ここからは日常読書をすると答えた学生 97 名を対象にした質問の回答結果を示す。

３．１「どうして本を読むのか」

こちらは「楽しい、面白いから」が 66% 、「知識の獲得や勉強になるから」が 31%、「友だちや家族も読んでいるから」が 2%、「本を読むように言われるから」が 1%であった。

３．２「何が現在の読書習慣に影響を与えたか」

こちらは「家の人の働きかけ」が 27%、「学校での一斉読書」が 19%、「友達」が 16%、「学校や司書の先生の働きかけ」が 8%、「図書館職員の働きかけ」が 5%、「読み聞かせをしてもらったこと」が 2%であり、23%が無回答であった。

３．３「どのように本を用意しているか」

こちらの質問は複数の項目に回答する学生もいたので、各項目の回答人数を記す。

「書店で買う」（60 人)、「学校図書館や公立図書館で借りる」(25 人)、「家にある本を読む」(24 人)、電子書籍サービスを利用する」（24 人)、「インターネットで買う」（14 人)、「友だちに借りる」（8 人)。

３．４「どんな本を最もよく読むか」

こちらも「最も」と設定したのだが複数回答になったので、その回答人数を記す。

「物語(小説)」（64 人)、「映画やドラマの原作」（17 人)、「ケータイ小説」(9 人)、「スポーツ関係の本」(9 人)、「コンピュータ関係の本」(7 人)、「歴史ものや伝記」(5 人)、「ハウツーもの」（3 人)、「科学の本」（1 人)、「古典の本」（1 人)、「将棋の本」（1 人)、「道路関係の本」（1 人)、「ファンタジーもの」（1 人)。

4. 学校図書館について

ここからは全員を対象に図書館の利用について質問した結果を記す。

４．1「1 か月にどのくらい“読書を目的に”図書館を利用するか」

結果は「よく行く」が 4%、「時々行く」が 16%、「あまり行かない」が 32%、「行かない」が 48%であった。

４．２「行かない理由は何か」

こちらは「書店またはインターネットで本を買うから」が 18%、「本を読みたいと思わないから」が 17%、「借りたり返したりする手間が面倒だから」が 14%、「電子書籍を買うから」が 3%、「返却期限までに読めないから」が 2%、「公立図書館の本を借りるから」が 1%、「学校図書館の利用の仕方が分からないから」が 1%、「学校の図書館には読みたい本がないから」が 0%であった。

４．３「図書館に一番望むことは何か」

こちらの質問には図書館を普段利用しない学生には回答しづらいと思われたが、実際に無回答が見られた。結果は以下のとおりである。

「読みたくなる(と思う)本に出会うこと」が 52%、「勉強場所が十分にあること」が 15%、「もっといろんな本があること」が 14%、「開館時間が長いこと」が 7.6%、「本がわかりやすく並んでいること」が 5%、「調べものができるパソコンが配置されていること」が 1.6%、「一度に借りられる冊数が多いこと」と「本について相談できる人が常駐すること」がそれぞれ 0%であった。

また「読書目的で図書館に行かない」学生が図書館に最も望むことを拾いあげると、これに対する回答は、「読みたくなる(と思う)本に出会うこと」が 67%、「勉強場所が十分にあること」が 17%、「もっといろんな本があること」が 9 %、「調べものができるパソコンが配置されていること」と、「開館時

間が長いこと」がそれぞれ２％であった。

5. 考察

「読書は好きか」という質問に「読書が嫌い」、「どちらかと言えば嫌い」と回答した学生の、「読書は必要だと思うか」との続く質問に対して、どちらかといえば大事だと感じる割合が 57%であることから、好きではないが必要性を感じていることがうかがえる。

１か月に読んでいる冊数に関しては半分以上の学生が平均して１～3 冊とあり、これは休み時間のスマートフォンの画面を凝視する状況を思うと予想していた数より高く、読書習慣は生活環境が変化してもなくなるものではないと感じる。

実際、高校生以上の読書率、読書冊数はテレビやゲーム、インターネット、スマートフォンの普及という外部環境の変化をあまり受けていないと考えられており、特に「読書習慣の有無とスマートフォンの利用時間にほぼ相関がない」と結論付けられている[3]。

次に家庭という環境における読書についてであるが、余暇をともに読書に充てる家庭は極めて少ないが、意外に家族が読書する姿を学生は見ていることが分かり、これには比較的本に慣れ親しんでいかれる状況にある、つまり読書する姿のある家庭環境にあっては、読書をしていない学生がこれからでも「その本はおもしろいのだろうか」と気になることをきっかけに読書に関心を抱く可能性が十分にあると思われる。

次に本の入手方法についてであるが、「書店で買う」学生が 60 人いたことは喜ばしく思われる。実際、読書が好きという学生に時々自分で購入したのかどうか尋ねると、手に取って少し読んでみないと購入したい本が決められないといった声を聞く。とにかく本を買いに出かけるという行為が休日の過ごし方の一つに入っていることが想像され、本の存在価値はいまだ変わらないことがうかがえる。

さらに注目したことは「読書目的では図書館に行かない」学生が図書館に望むことである。こちらから 67%の学生が、図書館に「読みたくなる(と思う)本に出会うこと」を望んでいることが判明した。この結果には、そもそも学校図書館に自分の好みに合った本はないと思っているのかもしれないが、読書に関心はあるが図書館の利用経験や読書経験が乏しいため実際に出向いても選書ができるか、そして関心が持てるようになるのか自信がないという気持ちの表れとも想像できる。

なお、同じ質問に対して「勉強場所が十分にあること」の 17%が続くが、こちらは図書館の改修に伴い学習室が整備され、理想的な学習スペースが確保されていることを、図書館を利用していないために知らないことが想像される。

これらをふまえて我々には図書館の内装や本の配置などに適宜変化を施す作業の継続に加えて、学校図書館の蔵書に期待をしていないと思われる学生と図書館の利用にあまり関心のない学生に対する図書館の魅力の発信とそれを確実に届ける作業が功を奏することを期待していきたい。

参考文献

[1] 全国学校図書館協議会:「児童生徒の不読率をどう捉えるか」, 学校図書館　7 月号, 2024, p.28-29
[2] 全国学校図書館協議会: 「簡単ではない高校生の「不読率」のとらえ方」, 学校図書館　7 月号, 2024, p.34
[3] 全国学校図書館協議会:「簡単ではない高校生の「不読率」のとらえ方」, 学校図書館　7 月号, 2024, p.34